

清溪セミナー研修 2019.07.26-27 日本青年館

調査事項 2 女性の視点を生かした災害に強い地域づくり

(静岡大学教育学部教授 池田恵子 同防災総合総合センター兼任教員)

作成者 保守の会：吉田つとむ

<概要と所感を合わせて記載>

このテーマに関して、東日本大震災以降の地震の分析資料が様々に提示されました。その中で、警察庁の資料をもとに、高齢者の方の被害割合が多くなっていることが上げられていました。熊本地震では、災害の直接死の4倍も震災関連死が発生しているとされているという資料（熊本県まとめ、朝日新聞、9月4日、WEB版の資料が引用される）も使われました。

震災時にある、車中泊が多数発生し、それが長期間になって、体調不良を起こすことは周知の事実です。*私も震災後に一人で熊本地震の当地を訪れた際に、益城熊本空港 IC に隣接した「グランメッセ熊本」の駐車場は、被災者の自家用車で一杯になっていたことを直に見た次第です。



講演では、「性別・立場による困難の違い」が2つの面から説明されました。片方の「性別・立場による困難の違い①」は、生活環境・安全面の困難とされるものになっています。

もう片方の「性別・立場による困難の違い②」は、健康面の困難、家庭・社会生活面の困難についてでした。

*下段の文は、池田恵子氏のものをそのまま書いたものがありますが、自分の意思を表示した部分もあります。それは、明白に記述していると思いますの

で、ご理解ください。

「性別・立場による困難の違い①」は、3項目で説明されています。

一つ目は、生活環境（プライバシー、衛生）

着替え、授乳、洗濯物の物干しに直接的な課題が生じます。

避難所は数か月、それ以上になることがあります。

仮設住宅の建設では、阪神大震災では年単位の幅がありました。仮設住宅の建設場所が遠距離にも作られました。私は、県立体育館の避難所に何泊もしました。関係する被災者の方の仮設住宅に泊めていただいたこともあります。もちろん、最初に訪れた時は野宿をしました。

中越大地震では、もっと早い時期からの建設が行われていました。山古志村の住民は長岡市に全村避難をされ、私はその小学校を訪ねました。宿泊は、満杯のビジネスホテルを使用しました。また、しばらく経って、十日町市を訪れた際には、訪問先の福祉作業所の関係施設で宿泊しました。

東日本大震災では、大規模で福島原発事故の発生もあって、遠距離大規模避難が生じました。私は、そこには訪れず、汚染地域の隣接被災地域を回りました。復旧作業のため、膨大な従業者の宿泊施設（一般のホテル、あるいは民宿的な建物）に入り込みました。

女性特有の窮状の度合いを見ることは、難しいことです。

二つ目は、物資の不足と配布方法の問題

女性特有の用品、下着類の不足

乳幼児用・介護用品の不足

在宅避難者が物資を受け取れず

これらの対策は、避難者の自治組織（対策本部）がそのように機能するかが課題ですが、個別の場所で大きく異なっていました。災害の当事者自身の組織が機能しないと、単純に町内会長がその任を担当するのは、現実を無視した対応です。あくまで、被災した人が当事者であるべきです。

この池田恵子氏の講演を聞いて思ったことですが、避難所の代表者が男性ならば、副は女性が担当するのが現実を解した組織人事の基本だと思いました。避難者の情報収集を女性が担当するべきであることは自明のことだと思いました。

三つ目は、安全の問題

ハラスメント、DV、性暴力の発生（対価型、環境不備型）

日常にもまして声を上げにくい

これらは、私が現地で訪れてもその場で発見した事例はありません。間接的に見分したことはあります。

ひとえに、避難者の自治組織（対策本部）には、中枢幹部に女性が必須だし、実効性のある安全を確保するには、中堅にも欠かせないと思います。

もう片方の「性別・立場による困難の違い②」は、健康面の困難、家庭・社会生活面の困難についてでした。*以降は、簡略に記載することにしました。

一つ目は、心身の健康、健康面の困難を上げられています。

女性の方が多岐な課題があり、その克服はとても困難な課題ですが、私は、女性自身が避難者の自治組織（対策本部）の中枢に加わって、問題をクリアーにするところから始めるべきだと思っています。

二つ目は、性別役割の顕在化、家庭・社会生活面の困難を上げられています。

私が思うに、女性にとって、避難の期間が長くなればなるほど、家族の世話、避難者集団の世話が増し、自身の体調の維持がとても大変だと理解しています。